

## 五十六 戦争期の日記を読む

世の中がおかしいと感じるようになってもう何年になるだろうか。いつの時代にも未熟な人間のつくる社会は問題をかかえていると言えばそれまでだが、この四半世紀の状態が前の時代よりも悪くなってきたことを否定する人は少ない。最近状態はますますおかしくなって、この国の社会全般が疲労してうまく機能していないことを露呈している。早かれ遅かれ建て直しの必要な事態に至ると考えざるをえない。そして、数枚の瓦が実際に落ち始めるときに遭遇するだろう混乱を見通せないことが不安を大きくしている。そういうわけ、社会が大きく変動したときどういいう状態になって、人間はどういう生き方ができたか、今のわたしの関心事の一つである。

そういう中で、清沢洌という人の『暗黒日記』が目にとまった。リベラルなジャーナリストが、一九四二年から死去する一九四五年五月までのアジア太平洋戦争期を、世を覆っていた戦争熱に侵されず的確に見つめて書いた日記という。わたしがもっと知りたいと思っっている直近の変動のただなかの時期である。読むべきだろう。手にしたのは、約三分

のみに縮約して収録した岩波文庫版である。

この日記は、もともと「戦争日記」と題されてつづられたのだそうだ。出版の際に採用された『暗黒日記』という書名が、初めから勝てない戦争と分かっていた著者が暗い気分でも悔しい思いをしながらつづった日記にそぐわないわけではない。だが清沢洸は、「現代史を後日書くために記録を止め置かんとする」意図でこの日記を書いた。「暗黒日記」という気分よりもしっかりした意識をもって、戦争期を記録しようとしたのである。日本社会に稀なこういう強靱な精神を大切にする必要がある、と思う。

日記は日米開戦から一年目に書き始められた。大局の見えていた鋭敏な知性は、現代の日本人にも身に覚えのある多くの欠点を指摘する。たとえば、開戦一周年目の大蔵大臣の放送はまるで感情的阿鼻吸喚であった、米国を鬼畜、英国を悪魔と呼ぶ夕方の放送（まぎれもないヘイト・スピーチ）に家人もスウィッチをきった、と。この批判は現代の日本を撃っていることに気づかなければならない。インターネット上のニュースはマス・メディア各社の見出しを掲げているが、比較によって、今では近隣二国に対する嫌悪感のにじんでいるものが半数近くを占めることが分かる。それは世論に影響を与えていて、東アジアに友好関係を築こうとする動きを妨げているにちがいない。清沢が右翼や国粹主義者をゴロツキと呼ぶのは、敗戦の確実なことを知る口惜しさの表現だろう。そこには、失敗の原

因として、「極端なる議論の持主のみが中枢を占有し、一般識者に責任感を分担せしめぬこと」を挙げている。この指摘も、現在の主流派がそのようなやり方で形成されていることを撃つ。清沢は、「考え方が違っても愛国者であり得、また意見が相違しても団結することができる。そう我が国の〈愛国者〉は考えることができぬ」と言う。痛切なことは、今も主流派の中枢を占めることに熱心な人たちが、このまっとうな嘆きを真摯に受けとめようとしないことである。「一つのイデオロギーは経験によって改めることは難し」という経験則のなんとにがいことか。

まだまだたくさん書いてある。その警句の一端をランダムに拾うと、——日本人ほど自家宣伝する国民は他にない、（それでいて）宣伝下手であり、嘘をつくところとその道徳的弱みがある、政治家に必要なのは心のフレキシビリティである、今は第五等程度の頭脳が憲法や法律を蹂躪してやっっている、世界においてかくのごとき幼稚稚愚味な指導者が国家の重大時期に国家を率いたることありや、……。毎日こうした嘆声を洩らすのを常とする、と清沢は嘆く。この日記を読み進むと、指摘がいちいち現在の危うい状況に当てはまることに気づかずにはおれない。たいへん身に伝える。

批判は深く文化にまで及ぶ。「名前を変えることが一番楽な自己満足だ」という文は、

今も言い換えや美辞麗句で真相を見えなくする日本政府の、品性のない手法を気づかせる。「精神主義の限界はある。：具体的方法がなくては何にもならぬ」のだ。筆法は、いわゆる言論人に対しても、「客観性がない、昨今は知識というものを全く侮辱している」などと鋭い。結局問題は教育にある、と清沢は考える。「この戦争において現れた最も大きな事実は、日本の教育の欠陥だ。信じ得ざるまでの観念主義、形式主義である」、「教育の失敗だ。理想と、教養なく、ただ〈技術〉だけを習得した結果だ」……、と。「困難なことは、日本は断じて過去の失敗を認めないことにある」、また、「日本には自分の立場しかない。この心的態度をかえる教育をしなければ」という言葉は重い。「(敗戦後)当分は戦争を嫌う気持ちが起ころうから、その間に正しい教育をしなくてはならぬ。それから婦人の地位をあげることも必要だ」というような聡明さが現われた文もある。しかし、現在の状況は、これらの教訓を生かす教育が実行されなかったことを教える。

清沢涑の独立心は、一九〇六年末に十六歳で米国に留学したことで培われたらしい。雑役をしながらカレッジで政治・経済学を学び、さらに一九一八年まで、邦字新聞の記者・寄稿家として米国社会で活動して、ジャーナリストとして広くて高い見識を養ったという。興隆する時代の米国で、教育は充実して社会も活気に満ちていただろう。現在の留学生よりもよい時代に遭遇したのだと考えられる。そういう人が第一次世界大戦後の日本に

帰国したのである。だが、坂の上で停滞し道をそらしていった日本は、このように貴重な人材の活動をむしろ抑圧した。そして、敗戦直前の五月に亡くなり、できたはずの戦後社会への貢献は果たせぬままとなった。日本という国は、最澄のいう「国の宝」を大切にしないのだ。

敗戦を見通していたこの人は、戦後の構想をもっていた。その中心は、言論の自由など人類の到達したりべらるな価値の尊重にあった。戦後七十年経ってそれらの諸価値がまたむしばまれてきたと見るのは杞憂だろうか。日本人の覚醒を願いたいものだ。他方で、清沢は、欧米人の書いた書物から「日清、日露——少なくとも日露戦争をしないで、バランス・オブ・パワーを握って、英国的海洋政策に乗り出したらば如何」というような大局観を引き出しえる人である。世界経済が展望を見失って諸国の体制が揺らいでいる現在、このようにフレキシブルな構想を模索すべき時だと思う。戦争中の人命の粗末な扱いに對して憤った清沢は、「官吏はその責任を民衆に負うのでなくては行政は改善出来ぬ」と言う。決定に参画している政治家・官僚たちの責任感は、江戸時代の幕府・各藩の重役にくらべても、二十世紀以後希薄になっている。精神のない専門人、心情のない人間が大手をふっているのを見過ごしてはいけない。

\*

『暗黒日記』を読んで触発され、書棚にあった渡辺一夫の『敗戦日記』（博文館新書を取り出した。それは一九四五年三月十一日から書き始められた。死者・行方不明者十万人を数えた前日の東京大空襲の惨劇が、学究肌の仏文学者に衝撃を与えてペンをとらせたのである。六月六日、妻を疎開させ自分は「死ぬために」東京に残る覚悟をした人は、次のように書いた。——この小さなノートを残さねばならない。あらゆる日本人に読んでもらわねばならない。この国と人間を愛し、この国のありかたを恥じる一人の若い男が、この危機にあつてどんな気持ちで生きたかが、これを読めばわかるからだ——。

その日記は、フランス留学中にラブレール研究のための書誌を作成したノートに、天地を逆にして裏表紙側のページから書きつけられていたという。見つけにくいところには大部分フランス語で小さく書かれていたのは、摘発されにくくするためだったのだろう（七月二十四日に、自身の属する文学部のこととして、ある教授が敗北するだろうと発言した元教授を憲兵隊に密告したという話を置き、続けて、「小生の言動が部長に問題になっているらしい」と書いているから、搜索を受ける危険はありえたのである）。まことに不幸な時代に遭遇したものだ。亡くなった一九七五年にそれが発見されたのは幸いであつた。おか

げで、思慮深い人が遭遇した戦争期をどのように生きようとしたかを知ることができる。日記の形式は、さまざまなことを書き直すことなく時系列で書き継ぐようにさせる。そこには、出来事に対する感想や、さらに筆者の内面まで顔を出すことがある。だから、尊敬できる人が書いたそのような日記を読む者は教訓を得ることができる。

渡辺の日記にも、清沢の日記のように、社会批評があり世のありさまを嘆く言葉がある。それは、ジャーナリストの清沢ほど政治・歴史の大局や状況を実際的に把握したものではない。けれども、本物の知識人である渡辺は、一般の大学人よりも社会についての基礎的な知識をもっていたと見える。図式を描いて政治構造を分析的に理解しようとする試みをしている。事態をそこまで悪くさせた原因として、日本の社会や文化や精神のありようの欠点も見つめている。清沢の指摘に重なるのは当然であった。だが知性豊かな渡辺には、それを深く時代と人間の問題として考えようとする傾向がある。そうやって、毎日ではないが、その知性がとらえた問題を短くメモすることでこの日記ができたのだ。つけ加えれば、絶望の理由に「国外脱出、亡命の不可能なること」が挙げられている。この点に、国内にとどまって敗戦の憂き目にあつた日本人の「戦争日記」が亡命したトーマス・マンの日記と異なる響きをもつ理由がある。

人文学者ラブレの研究者は自身も立派な人文学者であった。戦争を身に引き受けて、死を考え、竹槍をとらされても「決してアメリカ人は殺さぬ。進んで捕虜になろう」と思ったりする（当時の日本にこのように考えることができる人々がもつといたなら）。そして、アランを思い出して、「眺めていてやろう」と考え、バルザックを読んで、「生かすべき青年たちを死なねばならぬとしたナポレオンは外道だ」と思う。しかし、敗戦へと向かう戦争と世の退廃を眺めれば、絶望が頭をもたげ、希望を見つけようとして、書きつけるメモは曲折する。「こんな薄っぺらな文化国は燃えてもかまひはせぬ」と嘆きは高まり、「知識人の弱さ、あるいは卑劣さは致命的であった。日本に真の知識人は存在しないと思わせる。知識人は、考える自由と思想の完全性を守るために、強く、かつ勇敢でなければならぬ」と反省をする。ところで渡辺は、絶望を感じて書き始めた最初の日に、その記録が「わが第二の人生において確実に役立つであろう」と書きつけている。実際、戦期の経験はその人格を鍛え、戦後の仕事に生かされたのだと思う。このような不幸にも、人は「いささかの希望を見出さなければならぬ」。

再読して考えることは尽きない。しかし、ほかの人の日記との比較がこの思索のねらいなので、この日記から汲みとるべきことが多いことを指摘して次に移ろう。ただ、渡辺一夫が多くの知識人よりも高い見識をもつことができた理由を考えておく必要があると思



う。日記を読んでみれば、渡辺の読書が普通の文学者よりも広いことが分かる。人文主義者を研究した人は、広く人文学の領域の書物に関心を向ける習慣を養ったのだろう。社会の変動が個人に大きな作用を及ぼすのである。人は、その社会と人間のことを知る必要があるのだ。

戦争期の日記で読んだものに、もう一つ永井荷風の『断腸亭日乗』がある。変調した世の中を見放して偏奇館に住む作家が独特の筆法で書きつけたものである。アメリカとフランスに遊学して和洋の文化に通じた人の戯作者流のスタイルは、一九一〇年の大逆事件の際に、「日本はアメリカの個人尊重もフランスの伝統遵守もなしに上辺の西欧化に専心し、体制派は、逆らう市民を迫害している。ドレフェス事件を糾弾したゾラの勇気がなければ、戯作者に身をおとすしかない」と考えて、始まったものらしい。洋風のモダンな自宅を偏奇館と呼んだ人は、世界基準で見れば偏奇なのは日本の社会の方だと思っていたにちがいない。結局、「個人主義」に徹することを選んだのである。断腸の思いを秘めて身を貶めた戯作者の『断腸亭日乗』はたしかにおもしろい。けれども、批判は「紙背」に隠され、園丁のお手本にできる生き方でもないから、今回の思索の材料にはなりにくい。

じつは、書棚にもう一つ大佛次郎の『敗戦日記』（草思社）があった。一九四四年九月、自由日記帳に表題もなしに突然書き始められた日記で、死後の一九七七年、三万五千冊の単行本と二万冊の雑誌のほかにあった大量の資料の中から見つかったという。この経緯は渡辺一夫の日記の場合と似たところがある。『敗戦日記』という書名も、同じく刊行のときにつけられたものだそう。以前のわたしは、最初の数ページに、名を知られた作家の鎌倉での戦争期にしてはまだゆとりのある日常生活を見て、緊迫さを感じることができず、時間にゆとりのなかったせいもあって読むのを中断していたのである。今回、『暗黒日記』を読んで、大佛次郎の日記も読み通すべきだと考えた。

その気になって読んでみれば、この書物の値打ちがわかった。この日記には筆者の考えたことや感情はほとんど記されていない。それが作家大佛次郎のスタイルなのだ。すでに敗戦必至の情勢が見えてきた時期に書き始められたのは、ある種の構想が芽生えたからだろう。日記には、作家仲間や新聞・雑誌記者との交際と戦時下での日常生活や、ニュースに耳を傾けているようすが記されているが、主眼は、単に戦局ではなく、物価の実勢価格など生活に関係することから、世相と人々の動き、記者から得た情報やうわさ話など、戦争がもたらす尋常でない総体を、できるだけ記録しようとすることにあった。この日記には清沢洌のような鋭い社会時評はない。日記自体として『断腸亭日乗』ほど文学的な魅力

は強くなく、また、渡辺一夫の日記ほど心に訴える力はないかもしれない。しかし、大佛次郎の『敗戦日記』は、自分で可能なかぎり戦争期の社会と人間のありさまを記録したその資料としての価値に加えて、戦後に小説の枠を越えて実った大作の作付けがどのようであったかを教えてくれる。作品の背後にあるその人となりも垣間見せてくれる。

読書好きが嵩じて作家になった人は、東京大学法学部政治学科で学んだ。『鞍馬天狗』を書く小説家の胸のうちには開明的な自由主義があったのである。「勉強」と呼ぶ読書は、主として文学作品だが「コンミュン史」なども含んでいる。すでに『ドレフュス事件』に関心を抱きノンフィクション作品を手がけていたが、この戦争期に、革命的フランス最後の民衆蜂起パリ・コムユーンを記述した『パリ燃ゆ』の下準備が始まったのだ。それは、パリ・コムユーンと同時期の日本の幕末・維新の変動期への関心につながっていたと思われる（渡辺一夫もエドモン・ド・ゴンクール日記を読んでパリ・コムユーンの部分に興味を示している。両者が敗戦必至の戦争下でパリ・コムユーンの動乱に関心を寄せたのは、ただの偶然ではないだろう）。大佛には、直面している無謀な戦争が日本の前回の変動と無関係ではないという意識があったのではないだろうか。そしてのちに、大作『天皇の世紀』が結実したのだ。

『天皇の世紀』を「蝶の雑記帳五十一」で取りあげたのは、同じ幕末・維新の変動期を描いた小説『夜明け前』と対照させてのことだった。『夜明け前』を優れた文学だと考えるわたしは、一九四三年八月に亡くなった島崎藤村が、同時代の戦争をどう見ていたか知りたいと思う。だが、少し調べてみたところでは、出版された日記はないようだし、中絶絶筆となった『東方の門』はどうもぜひ読むほどのものではないらしい（大佛は島崎家からこの本を送ってきたと記したが、感想は書いていない）。

それでは、第二次世界大戦の変動期を日本の外の人ほどのように経験したのか、それが次の問いであった。

\*

わたしは、聞いたことのある『トーマス・マン日記』の「1944-1946」を選んだ。日本と様態の差はあれ全体主義に苦しめられ、同じく徹底的な敗北をこうむったドイツ人だし、その小説を二、三読んでいて、同世代の島崎藤村との対比も念頭にあった。県立図書館にあることを知って市立図書館を通して借り受けた。分厚い本だ。読み始めて、日記の記述

がわたしの期待とはずれていることを知った。一九二九年ノーベル文学賞を受賞した作家は、ナチズムと対決姿勢を示していて妻がユダヤ系であったことから、政権に就いたヒトラーが強権を発動した一九三三年にすでに国外へ脱出しており、一九三八年からはアメリカ合衆国に居を構え、一九四四年には米国民民になっていた。

『日記 1944-1946』には、当然、戦争が濃い影を落としている。トーマス・マンは、熱心に新聞やラジオのニュースに耳を傾けて戦況と情勢を理解しようと努め、それについて記している。興味深いことは、戦況を知るのに有利な合衆国に住んでいたトーマス・マンほどの人でも、マス・メディアの報道だけでは遠いヨーロッパの戦争の大局をよく見通せず、一喜一憂していたということである。それほどにも祖国の行く末に冷静ではおれなかつたのだらう。教訓を得るとすれば、日常生活に追われがちな人間が国家を挙げての長い戦争（ゆつくりと進展する歴史）を把握することは、たやすくはないことである。その日記は本人に自明な立場や考え方を前提に書かれていて、評言は断片的である。戦争に関連してマンの考えたことは、BBC放送で自分の声でドイツ人へ呼びかけた文章やほかの文章を読まなければ、精確には判らない。註の中のわずかにマンの立場と考えを示す断片と、日本語編者の序文・あとがきがおおよそのことを教えてくれるだけである。わたしの目についたのは、小説の創作活動や、ホルクハイマーやアドルノなどの知識人・音楽家

などと高名な大作家との接触を求めた人たちとの交流・文通のこと、音楽や映画を楽しみ、毎日のように散歩をしていることなど日々のもとても文化的な生活の方だった。

初めて知ったことだが、トーマス・マンは、第一次世界大戦のときには古いドイツ精神を擁護していたのが、ナチズムへの反対を通して民主主義の立場に到達したものでらしい。一九四四年には、「今日、自由と平等の関係では、重心が平等と経済正義の側に傾き、個人の正義を離れ、社会の正義へ移ってきたことをだれもが感じている。今や社会的民主主義は時代の要請である」と書くようになっていた。この原則的立場にわたしも賛同する。しかし、一人の人間はその基本的思想では表現し尽くせない言動をする。日記は、戦争の情勢やうわさに動揺しているさまを示し、自分への賛同と敵対への好悪をもらして、人間の主観というもののあり方を明るみに出す。それに対して編者は、偉大な小説家への尊敬の念から、「矛盾のかたまりだった」としなげながらも、「その優柔不断、狐疑逡巡とその再反省といった態度こそがトーマス・マンを弁護する」と考える。そのとおりなのだろう。マンはドイツ市民として帰国することはしなかった。「国民社会主義の行為を否定し、断罪する」あまり、「十数年にわたって国民社会主義政権の支配に追従し続けたドイツ国民に対する不信の念が、圧政に苦しめられた国民に対する理解同情よりも強かった」ので

ある。そのことに、日本を脱出できず苦境を味わった人の日記を読んだあとでは、しつくりしないものを感じる。日本人が欧米人の白黒をはっきり割り切る態度になじめないせいだけではない。ドイツ人のあいだでも、敵国で安全に暮らしながら国内にとどまった人々へ放送し、戦後ドイツ国民への同情が足りないと見えたマンの態度に賛否両論があったらしい。同じく米国に亡命していてもあったブレヒトとはイデオロギーの異なるせいで対立したようだ（日記にブレヒトの書いた文に同意する記述もあるのに）。ブレヒトは、米国のマッカーシズムから逃れてヨーロッパに帰ったが、生地のある西ドイツに入らず東ドイツに活動の場を求めたのだという、フランスに亡命したベンヤミンは、早く一九四〇年にナチスの手を逃れてピレネー山脈を越えようとしたが果たせず命を落とした、∴∴。巨大化した悪が歪めた社会からそれぞれの人がこうむった被害は運命と呼ぶほかはない。わたしがわずかに著作から学んだことのあるドイツ人たちは、全体主義の戦争という異常な事態にどのように考えて立ち向かったか、まだまだ知らないことばかりだ。「第二次世界大戦の変動期を日本の外の人はどのように経験したのか」というわたしの問いは宿題として残る。

\*

ともあれ、戦争という大きな変動に遭遇した文筆家の日記をいくつか読んできた。政治・社会学の素養をもつジャーナリストであった清沢冽の日記と比較してみれば、小説家の社会の動向への見方が弱かったと言わざるをえない。二十世紀前半の人々は、時代に制約されて、政治・社会的な関心が薄かったせいだろう。悲惨な戦争を経験したあと、それは改まっただろうか。楽観できない状態のように見える。社会をおおよそ正しくとらえるには、社会科学の知識と方法を一定程度身につける必要があるのだと思う。しかし、それが不十分だとしても、運命に正対すれば人は大きな過ちを犯さずにすむはずだ。

最後に、銃後で日記を書いた人ではなく、銃を持って戦場に行かされた人のことを考えてみよう。すでに「蝶の雑記帳二十三」で取りあげた大岡昇平は、戦後に作家になったので、比較の上からもふさわしいだろう。大岡が補充兵として徴兵されたのは三十五歳のときである。運命に正対できるほどの人格を形成していた人は、過酷な体験を消化して文学に昇華する作家になった。変動期をよく見つめた渡辺一夫や大佛次郎も戦後の活動を高めたのだけれども、戦争を骨身にしてみても味わった大岡昇平は、身心の傷を癒しがたく引き受けて戦後を生きたのだと思う。『証言その時々』は「続敗戦日記」なのだ。

わたしの問いは日本の現在に向かう。日本人の大勢順応・集団主義の行動様式が至った



全体主義の悪が決して小さかったわけではない。著作家や大学教授などいわゆる文化人で軍国主義にとりこまれ戦争熱を煽った人たちがいた。トーマス・マンの基準に照らすと断罪されるべき人たちだった。しかし、ドイツでナチズムへの協力者たちが指導的地位から追われたのに対し、日本では、政府をはじめ旧来の体制がほとんどそのまま継続された。現在、ドイツではネオ・ナチストが現われているが、旧来の思考法から脱出できずに古い言葉をそのまま使う日本のように現代世界の状況に無知だろうか。白日の下でもっと意見を表明し相互の見解の優劣を競える社会でなければいけないのだ。

わたしは、今、これらの「戦争日記」に記された言葉をとっても痛切に感じる。それは、戦後七十年を経て日本がかつてのような状態に近づいていると考えるからだ。どうか同胞がふたたび苦しい体験をすることがないように願いたい。そのためには、十五年の戦争期の社会と人間の動きをよく知っておかなければ、と思う。そして、そこで知ったことを、これから転換期を生きることになるだろう孫たちに伝えることが老人の役目だと思う。

